

算数科における「教えて考えさせる授業」を取り入れた授業づくりに関する研究

教育実践高度化専攻
小学校教員養成特別コース
P10057E 小阪 学史

1. 問題の所在と研究目的

「教師は授業で勝負する」といわれるように「わかる授業」は教師にとって永遠の課題である。しかし、筆者は自信を持って「わかる授業」といえる実践を行えたことがない。「児童が発言できない」「塾に通う児童にとって面白味がない」「児童の発言を授業に活かさない」「時間が足りない」などの問題が頻発する。

市川・鎭木 (2009) は、問題解決型の授業に代表される、「単元の導入部から自力発見や共同解決を促し、教師からの解説的な説明をほとんど行わないような授業」を「教えずに考えさせる授業」と呼び、「わからない授業」になるリスクの高い授業形態としている。彼らの主張をまとめると、「教えずに考えさせる授業」は以下のマイナス要因を持つ。これらの要因が、筆者の授業が失敗した要因であると考えられる。

- A1 自力で考えられない児童が多い。
- A2 討論に参加できる児童が限定される。
- A3 すぐにわかる児童は授業に興味を失う。
- A4 授業のねらいや目的から外れた「多様な意見」が出過ぎて、教師・児童が混乱する。
- A5 自力解決や討論に時間を浪費し、教師が補足説明やまとめをする時間がなくなる。
- A6 教科書を使わない場合が多く、授業後に振り返ってじっくり考える手立てが乏しい。

そこで市川・鎭木 (2009) は、これらの要因を取り除くことができる、「教えて考えさせる授業」を提案している(この授業形態については後に詳しく述べる)。筆者は授業改善のため、是非「教えて考えさせる授業」を授業づくりに取り入れたい。しかし、「教えて考えさせる授業」には多くの批判が寄せられており、この点を考慮する必要がある。以上のことから本研究では、批判をふまえたうえで、「教えて考えさせる授業」を取り入れた授業づくりについて検討し、授業実践を行うとともに、その分析・考察に基づいて、自身の授業づくりへの示唆を得ることを目的とする。

2. 研究報告書の構成

本論文の構成は次の通りである。

第1章では、市川・鎭木 (2009) をもとに、「教えて考えさせる授業」の概要・利点を述べ、研究目的を明らかにした。まとめると、「教えて考えさせる授業」

とは図1のような授業である。

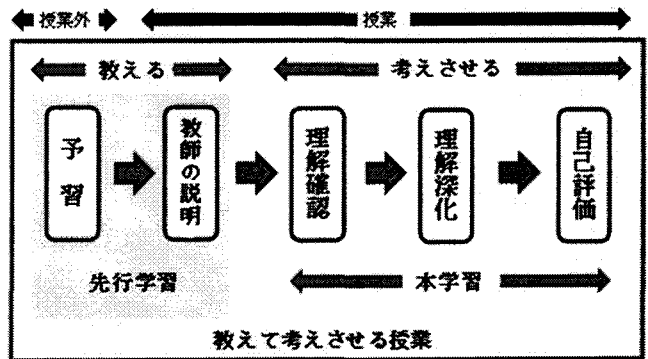


図1 「教えて考えさせる授業」(市川・鎭木, 2009)

第2章では、「教えて考えさせる授業」に対する批判を明らかにした。第1節では、清水 (2011) による批判を明らかにした。第2節では、正木孝昌 (2009) 等をもとに、「教えてはいけないこと」を明らかにした。「教えてはいけないこと」を「教える」のはおかしい」という批判である。

第3章では、第1章及び第2章をもとに「教えて考えさせる授業」について考察し、「教えて考えさせる授業」の利点及び問題点、「教えて考えさせる授業」を計画する際の留意点について明らかにした。また、どちらの授業形態を選択するべきかについて考察した。第1節では、第1章・2章をもとに、「教えずに考えさせる授業」の問題点を考察した。これをもとに、第2節で、「教えて考えさせる授業」の利点を明らかにした。以下に筆者が考える利点を、短くまとめて掲載する。

- B1 児童が自分で考えられるようになる。
- B2 皆が討論に参加しやすくなる。
- B3 よくできる児童にとってもやりがいのある授業になりやすい。
- B4 児童が焦点的、分析的に見たり考えたりしようとし、意見が焦点化される。
- B5 十分に補足説明やまとめができる。
- B6 授業に教科書を使うことができる。
- B7 子どもの学習機会が増える。
- B8 基礎的内容が身に付きやすい。

B9 発展的内容を取り扱うことができ、高いレベルに到達できる。

B10 児童が教科書にない新発見に満足する。

B11 児童が先取り学習していても、授業に支障がない。

第3節では、第2章をもとに、「教えて考えさせる授業」の問題点を明らかにした。以下に筆者が考える問題点を、短くまとめて掲載する。

C1 数学的思考が不足し、演繹に偏る恐れがある。

C2 数学的活動・経験が不足する恐れがある。

C3 能動的な態度を育てる授業としては、「教えずに考えさせる授業」の方が優れている。

C4 指導すべき重要な内容を、「伝達」しただけで、考えないまま授業が終わる恐れがある。

第4節では、第1節～第3節で明らかにしたことを考慮したうえで、どちらの授業形態を選ぶべきかについて考察した。結果、教師や児童の実力が十分ある場合は「教えずに考えさせる授業」を選択し、不十分な場合には「教えて考えさせる授業」を選択するべきであることが示された。第5節では、第2節・第3節で明らかにした「教えて考えさせる授業」の利点・問題点をもとに、「教えて考えさせる授業」を計画する際に留意すべき点を明らかにした。以下に筆者が考える留意点を、短くまとめて掲載する。

D1 「教える」の部分が、工夫したわかりやすい説明になっているか。

D2 「教師の説明」と「理解確認」の間で整合性がとれているか。

D3 「教師の説明」及び「理解確認」と「理解深化」の間で整合性がとれているか。

D4 理解深化課題が、すぐにわかってしまう児童にとっても、考えがいのある内容になっているか。

D5 「理解深化」が問題解決を通した学びになっているか。

D6 数学的思考が演繹のみに偏っていないか。

D7 数学的活動・経験が不足していないか。

D8 児童が理解すべき重要な内容について、「教師の説明」だけで終わっていないか。

第6節では、次章の実践授業について述べた。

第4章では、「教えて考えさせる授業」を取り入れた算数の実践授業を行い、B1～B11及びD1～D8をもとに授業を分析・考察することで、今後の自身の授業づくりへの示唆を得ることができた。第1節では実践授業の概要について述べた。第2節～第4節では、B1～B11及びD1～D8をもとに、第1時～第3時の

授業を考察した。第5節・第6節では、児童に対して実施したアンケート調査及び確認テストの結果を考察した。得られた成果については後で述べる。

第5章では、研究目的に対する本研究の成果をまとめ、今後の課題を示した。今後の課題についても後で述べる。

3. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

本研究を通して、筆者は4点の示唆を得た。

第1に、「教えて考えさせる授業」に対する批判をふまえたうえで、その利点B1～B11及び問題点C1～C4を示すことができた。また、利点については、実践授業を通して、ある程度その効果を確かめることができた。

第2に、「教えて考えさせる授業」を計画する際の留意点D1～D8を示すことができた。この視点は「教えて考えさせる授業」を分析・改善するためにも役立つことがわかった。

第3に、授業力が不十分な場合、「教えて考えさせる授業」を選択するべきだということが示唆された。これは授業実践の結果からも明らかであった。

第4に、「教えて考えさせる授業」は教科書を使うことを前提にしているが、あまり教科書にこだわりすぎると、うまくいかない場合があることが示唆された。教科書は「教えて考えさせる授業」に合わせているわけではないので、不都合な点も出てくるのだ。

(2) 今後の課題

今後の課題として次の2点があげられる。

第1に、予習についてである。「教えて考えさせる授業」は予習も視野に入れて授業を計画する。しかし、今回の授業実践では、予習をしてこない児童が多数見られた。今後は予習をしてくるように促す方法や、予習をしてこなかった児童に対する指導も考慮して、授業を計画しなければならない。予習に対する先行研究を参考に、この問題について考える必要がある。

第2に、授業力の向上についてである。今回の授業実践で、筆者はうまく問題解決を通した学びを構成することができなかった。筆者に「児童の発言を拾い、広げていく力」が不足していたからである。筆者は今後この点を意識して授業実践に臨まなければならない。また、最終的には「教えずに考えさせる授業」を適切に実施できるようにならなければいけない。

以上の点を今後の自身の課題とする。

修学指導教員 加藤 久恵
指導教員 加藤 久恵